『リアル』で対抗していくべき時

蔦谷栄一

蔦谷さんは「農的社会デザイン研究所」の代表であり、「武蔵野の歌が聞こえる」上演を通じて設立された「川崎平右衛門研究会」事務局長を担っておられます。

日本人の農業と協同のあり方についての提言者として知られる方で、農的社会について数々の著作を発表しておられます。

また教育者出身の奥様政子さんと共に、山梨県に子どもたちとの農業体験塾「農土香（のどか）農園」を開設しておられます。

いつもお世話になっているのに、仕事を離れてゆっくりお話しする機会がなく、やっぱりお正月っていいなあと思いました。（木下美智子）

先の2月11日、家内と二人ということでは久しぶりに現代座を訪問し、木村快さん、木下美智子さんご夫妻と懇談させていただいた。ご夫妻が東京に戻って落ち着かれてからも、コロナの影響とともに、家内が孫の世話で時間がままならず、正月も大きく過ぎてこの日になったものである。そこでの話の中心は孫の話から当然のようにコロナの話となった。そのエッセンスを記録代わりに寄稿させていただく次第。

◆人の心を失うバーチャル時代

仕事、暮らしの領域でコロナの影響を受けて大きく変化したことは多いが、最も大きな変化を象徴的に言えばバーチャル化ということになる、というのが四人の一致したところだ。そのあらましなりポイントは次のようなことであった。

まず会議や集会の類はすっかりZOOMによるTV会議に置き換えられてしまい、顔を合わせて場面を共有しながら協議することが急減してしまった。まだ顔を知った者どうしが、こうした状況下、やむを得ず、次善の策とTV会議をやっているうちはまだしも、これが本来化して、画面を通じて知る相手が相手のすべてだと思うようになった時が恐ろしい。会議はますます機能的に進行するようになり、結論を出すことだけを目的とする場に陥ることになるのではないか。一同が顔を合わせることによって人を知り、場を知り、場面・雰囲気を共有すること自体に大きな意味・価値があるのであって、これがしっかりできていれば極端な話、結論がどちらに転んでも大差はなく、さして問題もなかろう。

◆データを食べて生きる幻の時代

そしてコロナにともなう働き方改革、在宅勤務の増加によって、ネットをつうじての管理徹底が凄まじい。在宅勤務に変わることによって何となく通勤時間は減少し仕事の軽減がはかられ効率化した、と受け止められがちである。業種や個別の事情によるとしても、実態は仕事時間は実質増加し、自宅での仕事場確保が困難な人も少なくなく、仕事環境は悪化し、一方では相対しての管理は減少して、数字だけによる管理が徹底されつつある。まさに人間のデータへの従属化が進行していると言わざるを得ない。

さらにこうしたZOOMによる会議、在宅勤務、ネットによる管理等が相まってGAFAM（G＝Google、A=Amazon、F=Facebook、A=Apple、M＝Microsoft）による寡占化を招来し、もはや多国籍企業という以上に巨大企業は国家を超えたコントロール能力を有するに至っている。同時にITに関連する業界、中でも経営層が高額の所得を集中して獲得するようになり、所得格差の拡大は著しい。そもそも物的価値を何も生み出すわけではない情報産業が所得を独占し、物を生産する農業や労働者層への富の分配はきわめて薄い。

◆私たちはどこへ向かっていたのか

われわれは時代の経過とともに、多少のアップダウンはありながらも、世界は豊かさを増していく、と考えてきた。すなわち未来に希望を抱いてきた。ところが文明が発展し、GDP増加を自己目的化した成長神話が肥大化し、さらにコロナによってバーチャル化が加速するほどに、われわれはより貧しくなり希望を失いつつあるのではないか。

今、私たちが希望を取り戻していくためには、バーチャル化する流れの中で「リアル」にこだわり、リアルな活動の場を増やしていくことが肝心なところだ。

◆観客3人でも劇場を、協同を考える快塾を

そこであなた、私はどうするのか。とりあえず木下さんは、三人劇場（三人集まれば語り芝居だってできる）への取組み、私と家内は新・快塾（これまで不定期で快塾を開催してきたが、メンバーが忙しいこともあって回数なり時間が限られることから、これとは別のメンバーによる定期的な集まり）を開催。

そして快さんにはこうしたバーチャル化の流れを笑い、リアルに目を向けさせるような演劇を作ってもらいたい、というのが三人の意向。果たして、快さんはこれからどのような作品に取り組んでいくのか・・・。

自分ができるところで実行を積み上げていくしかない、というのが当日の結論。積小為大。とにかくできることをやっていこう、ということでお開きとなった。